

---

**いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。**

サークルO.L.

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

### 【Nコード】

N6256Z

### 【作者名】

サークルO・L・

### 【あらすじ】

タイトルが本編で、内容は詩である。

君を好きになったのはいつなのか？（前書き）

タイトルが本題で、お送りするのは尖角です。

君を好きになったのはいつなのか？

悲しいかな、今日も俺は独りに耐えて生きている。

苦しいかな、友達も彼女もいないただ一人の孤独の生活は。

嬉しいかな、誰にも知らずに死ねるたった一つの喜びは。

俺は涙を流さない。

涙というものはとつくの昔に枯れてしまったのだから。

大好きなんて言葉にはとつくに飽きてしまったのだ。

伝えることができない、たった一人の俺にのしかかる重圧。

そこにあるのは空虚な生活。

悲しみも、怒りも、喜びも、楽しみも、愛も、何も、そこにはない。

俺が君から奪った幸せは、俺から君というものを奪った。

それは、昨日の話だったのか？

それとも、数年前の過去の話なのか？

それとも、俺が生まれるずっと前の話だったのか？

俺はたった一人の孤独な悪魔。

俺に涙なんてものはいらぬ。

その涙を映すものは無く、誰も拭ってなぐれないのだから。

自分で拭うことなんてできないよ。

「君を抱きたい」というために腕を切り落としたから。

君に近づくことなんてできないよ。

その欲望を鎮めるために足を切り落としたのだから。

君の鼓動を知ることができないよ。

君にしたように、僕の胸にも穴をあけたのだから。

大好きだったんだ。この世の中で最も。

だけど、俺は罪深き罪人。

君に愛の生き死にを教えることなどできないのだ。

所詮、俺は生けとし死せるもの。

何もそこにはありはしない。

ただ、そこにあるのはたった一人の虚しき存在。

俺はふと、記憶の奥底を探ってみる。

夢か現か、幻か？

涙の意味は何なのか？

苦しいとは何なのか？

君というものは何なのか？

嬉しさは所々で俺に話しかける。

「君は今、幸せですか？」

「いいや、別に？」 俺は答える。

寂しさは俺に話を振ろうとする。

「君は一人でもいいのかい？」

「ああ、寂しくはないよ、、、」

悲しさは俺に言葉を投げかける。

「君は一体、何がしたい？」

「それは、ただただ死にたいだけだ・・・」

君は俺に言うのである。

「あなたは良い人」

じゃあ、なぜこんなことになるのか？

俺には意味が分からない。

愛が愛で無くなった時、それは一体何になると思う？

それはゾンビさ、寂しさゆえの一人の人生。

そうだ、俺は無意味に生きるだけ。

だけど、俺の記憶にそれは残っていない。

あたしは、気付いていたのかもしれない。

あなたが、別れを用意するより先に、あたし達の関係が終わりに近づいていたことに。

あなたの傍にいたのに、あなたは変わらないのに、あたしは変わってしまうもどかしさ。

寂しさがとめどなく溢れ出して、あたしは過去を振り返って見る。

いくらでも戻れるチャンスはあったはずなのに、あたしはそれに見向きもしないで突き進んだ。

だから、あたし達の関係は終わりを向けるんだ、、きっと。

ありがとう、ただそれだけは言わせてよ。

ちょっとしただけの恋人関係だったけど、楽しかったよ。



じゃあ、一体どこにあるのだろうか？

気持ちを静めてあなたの前に立ってみる。

すると、どうなると思う？

さっきまではトクトク流れていた私の血も、

いつの間にかドックンドックンに変わっているのである。

それはまるで映画の音響みたく大きな音で、

3Dのように私から突き出てきそうで。

あなたのことが好きなんだ。

この血よりも真っ赤な愛が、それを証明しようとしている。

だから、一歩だけでも君の下に近づいてみるよ。

それが、私にとっての精一杯の努力なんだから。

俺はそう思い、君の瞳を見つめてみる。

あなたに会いたい。

それ以外の気持ちも、必要なのだろうか？

私にはあなたしかない。

だから、私はあなたを求めるんだ。

あなたが、例え私を好きでなくても、

私が愛せるのならそれで構わない。

あなたの意見なんて聞いてないんだよ？

ああ、血だらけの人形たちよ！

私のために、お歌を唄いなさい。

ああ、血だらけのあなたたちよ！

私のために、骨と血肉になるのです。

ああ、素晴らしき子供たちよ！

私のために、死して無くなれ何もかも。

だが、そこに映りこむのは空っぽになった俺の姿。

口だけの想いならば、俺はそれなりに言えるであろう。

ただ、愛や恋だけでは語れないのが、君と僕との関係。

でも、俺は思うんだ。

約束を守れない俺、そして離れ離れになってしまった二人の距離。

愛しても、愛しても、なかなかその想いは届かない。

ならば、君を愛す理由なんて何もないんだ・・・。

だったら、俺は何をしても自由だろう？

君を振ったって、例え死んだって、、

逢いたくて、逢いたくても、叶わないならば、俺はこの愛しさを抱いて眠るよ。

俺は力を失っていたんだ。

君を知れば知るほど、俺は俺自身を見失っていく。

心は涙に溺れて、俺は記憶に埋もれていく。

叫びはない。そこにあるのは発狂という言葉だけ。

>こっちにおいでよ、キモチヨクナレルカラ。

>こっちにおいでよ、ダキシメテアゲルカラ。

君からそんな言葉が聞こえてくるようで、君の口元の動きを俺は直視できない。

>こっちにこいよ、クツテアゲヨウカ？

>こっちにこいよ、ヤイテシマオウカ？

俺はお返しに、その言葉を君に捧げる。

そう思った時には、すでに手遅れだった。

生と死の狭間、

過去と現在の記憶、

無意味と混沌の悲しみ、

俺は君を絶対に許さない。

例えば、人生が歪んだとしたって、

例えば、性格が捻じ曲がっていると言われたって、

俺は絶対に君を赦しはしない。

死ねばいいのに。

俺は、その言葉を君に捧ぐよ。

愛していた？

この俺様が？

君みたいな女を？

ビッチなんだよ？君は。

ヤレれば誰だって構わない君だよ？

俺が好きになる訳がないだろう？

屈辱だよ。

例え、君を一瞬でも愛したという事実があるのは。

最悪だよ。

君に指輪をあげてしまったことが  
。

君が好きだったけれど、想いすぎていた。

人生で少しだけ後悔したことがある。

それは君に別れを告げてしまったこと。

大好きだったけれど、なんだか気持ちはすれ違って、うまくいかない。

そんな日の繰り返しに俺は疲れてしまったから、君に別れを告げた。

それから、時々君のことを考えていた。

あの時・・・この時・・・そして今・・・

何をしてやればよかったのか？

それでも俺達の関係はダメだったのか？

苦しかった日々は免れたのか？乗り越えることができたのか？

俺は君と別れたことで何か手に入れることができたのか？

多分、手に入れたのは“後悔”

それだけだろう。

何事も、“やりすぎ”はよくない。

全てのことはうまくはいかない。

そんなことはわかっていたよ。

だけど、君とこのことの全部がダメだなんて思ってなんかいなかった。

俺は、考えたこともなかった。

君と出会って、喧嘩をして、それでいて苦しくって、ふと気が付けば別れていて・・・

そして、君は死んでしまった、いなくなってしまった・・・俺の前から・・・

何だ、人生ってそんなものなのか？

命ってそんなに簡単に失われるものなのか？

俺はわからないから、少しだけ神様に刃向ってみるよ。



それは、誰もが知っている“当たり前的事”。

歌を唄い、言葉を葬る。

そこにあるのは、人間の叫び。

我らは行く、悪魔の降臨儀式。

ここは正も誤も存在しない、偽りの世界。

本当なんてものは、ここにはありはしない。

君も俺も、そして全てが嘘偽りでできている。

さあ、血に染まるがいい。どこまでも真紅に。

真っ赤に飢えた獣どもが、お前の血を求めて蠢いているぞ？

さあ、啜れ。好きなだけ生き血を啜るがいい。

真っ赤に飢えた獣どもが、お前の魂を求めて扉を叩く。

だけど、俺はそんな当たり前に気付きもせず、俺はお前を愛し続けた。

俺はお前が憎い。

楽しかった人生を、つまらない人生に変えたお前が憎い。

お前に出逢うまでは、「あの子がかわいい」とか「あの子とやりたい」とか思えたのに、今はお前しか考えることができない。

憎くて、だけど愛してるから、、

お前を憎むことはできても、殺すことはできない。

せめて、出逢った人がお前じゃなかったのなら、俺は変わったのかな？

俺は違った人生を歩めていたのかな？

ありがとな、お前を憎んでいても、俺は幸せだったよ。

ありがとな、死んでも、お前だけは忘れないからな・・・

何もかもが手遅れ、何もかもが叶わない。

頭が飛ぶぐらいイカレた感じで、 頭が飛ぶぐらいキモチヨク、

頭がとろける位の熱いキスで、 頭の中が君だらけ 。

砕け散る心の音は虚しくて、切なくて、

俺はそんな想いを君に向けて放っっていたんだ 。

だけど、想いは届かない。

閉ざされた扉をどれだけ叩いたところで、

中にいる人は叩かれていることにすら気付かない。

そのことを知らない君は、俺に向かってどれだけひどい言葉を浴び  
させただろうか？

多分、そんなことにすら気付いていない君は、

これから先も俺を傷つけ続けるのだろう ？

そんな人生を望んだ覚えはないのに・・・。

俺達には、目の前の障壁なんて関係ない。

君が傍にいて付いて来てくれるなら、

乗り越えることだって、壊すことだってできる。

俺達に“不可能”なんて文字は無いんだよ。

昔、誰かが俺達に言ったよね？

「諦めなければ、夢は叶うもの」　だって　。

俺も、その通りだと思うよ。

だから、俺達は結ばれて、結婚することになったんだから。

今までありがとうございました、　俺の隣にいた恋人よ。

これからも宜しく願います、　俺の隣にいる君だけよ。

なのに、“君を失った”事だけは変わらない事実で。

人を人が好きになるのは当たり前前のことで、

いつか人が人を嫌いになるのも当たり前前のこと。

それは、別に何も悪いことじゃない。

ただ、自然というものがそのように成り立っているということなだけ。

ただ、それだけのことなんだ。

だから、君のことを俺が好きになったことだって、

君が俺のことを好きじゃなくなっただって、別に悪いことじゃないんだ。

誰も俺のことも、君のことも責めることはできないんだ。

ただ、それだけのことなんだ。

俺はそれから変わる努力を続けた。

「君と一緒にになりたい」と思っても、その想いは君には絶対に届かない。

君は俺をここに置いたまま死んでしまって、俺の隣にはもういない存在。

君の髪の毛の香りが残っている枕も、君の肌の温もりが残っている布団も、

君が死んでしまっただけからは、“遺品”としての意味しかなすことはない。

苦しくたって、もう涙を拭ってくれる人はいない。

寂しくたって、俺に愛を与えてくれる人はいない。

もつと傍にいたかったけど、どんな時も離したくなかったけど、

君が死んだことは、俺にはどうしようもできない事実。

だけど、俺だけは君を忘れないでここにいますから、

君が寂しくなって独りでいらなくなかった時は、俺の傍においでよ。

だけど、性格なんてものは「変えよう」と思ってすぐに変わるものじゃない。

あけおめです！

だけど、性格なんてものは「変えよう」と思ってすぐに変わるものじゃない。

心からの「ありがとう」、「心からの」「ごめんなさい」、「、、、

その二つを足したら、

君は一体何ができると思う？

それはね、

僕の大きな悲しみだよ。。

君は

絶対に受け取らないから、

僕という言葉なんて

絶対に受け取らないから、

二つを足すと

僕の大きな悲しみが生まれるんだ・・・。



君には絶対に、一生かかってもわからないだろう？

君はモテモテで、男になんて困らないから。

だけど、僕は君だけしか好きにはなれない。

だから、僕からは大きな悲しみが生まれるんだ・・・。

だけど、性格なんてものは「変えよう」と思ってすぐに変わるものじゃない。

書き方が変ですみません^^

俺はどこも変えることができなかった。

女にとって《愛する人に愛され続けること》が、どれほど大切なことか、あなたは理解しているのだろうか？

あなたは、きっと理解していないでしょうね。

女の気持ちなど微塵も考えたことがないあなたは、私の気持ちも考えることができなかった。

だから、他の女を傷つけることもあるでしょう。

だけど、負けることなく進むあなたは、過去の女なんて思い出さずに今の女を愛すでしょう。

だけどね、覚えておいてほしい事があるの。

女は《愛する人に愛され続けることが一番の幸せ》だということを。

あなたはいつか気付くでしょう。

「自分がいけなかった」と。

「自分が不幸を呼ぶんだ」と。

だけど、気付いた時には時すでに遅し。

あなたは私を不幸にした。他の女も不幸にした。

そして、これからも他の女を不幸にし続ける。

あなたは疫病神。 私の昔の大事な彼氏。

いつだって、俺の努力は報われない。

涙なんかいらんない。

涙を拭うハンカチだっていらんない。

俺には何もいらんない。

君だって、俺を不幸にさせるだけ。

だったら、君だっていらんない。

誰も、何もいらんない。

支えてくれるはずだった友達も、俺には何もしてくれない。

俺には支えてくれる人間がいないのだ。

だから、友達だっていらんない。

信用できるものなんて、信用できる絆なんて何もないんだ。

全ては裏切りの中で生まれているもの。

俺だって、君だって、誰だって、嘘偽りで固められただけの存在。

だけど、俺の目からは、なんで涙は溢れるんだろうか？

神様は俺に手を差し伸べてくれない。

殺してやる

俺はそう君に告げた。

大好きだったけど、

俺の最後の言葉はそれだった。

悲しかったな、俺等の人生。

温かかったな、俺等の過ごした時間。

苦しかったな、お前の死ねなかった最後。

ぬるかったな、俺の殺し方は。

一回で殺せなかった。

愛情がまだそこにはあったから、

無意識のうちに手加減をしてしまった。

だから、君の身体をあまり傷つけたくなかったけど、

俺は何回も何度も君の身体を刺してしまうことになった。

許してくれ、俺のした過ちを。

俺は許するよ、君のした過ちを。

思い返せば、いつだって俺は失敗ばかりだった。

遠く離れていても心は繋がっていて、

寂しくたって想いは今でも一緒だって信じてる。

だけど、君の方も同じように想ってくれているのかな？

送ってもすぐに返ってこない返信。

時間がかかるたび、君に何かあったんじゃないかって心配になるんだ。

今でも君が好きなんだ。

距離は遠くなっても、想いは近くだって思ってる。

だけど、君の方はどうなのかな？ 同じ気持ちなのかな？

寂しいよ、一人だけな気がするから。

苦しいよ、僕の君が隣にいないから。

どうすればいいのかな？ この溢れだす想いを。



あの時だって、この時だって、君といた時だって、そうだった。

君と共に写った、思い出の写真。

俺はそれを焼き捨てることができない。

思い出なんていらなと思っていたのに。

今、君がいればそれでいいと思っていたのに。

なのに、君が隣にいないのは現実だから、

俺はそれを静かに受け止めることしかできないから、

君に告げられた別れを大人しく引き受けることしかできない。

君と歩いた街並みも今は変わりつつあって、

写真の事が今は本当にあつた事なのかはわからない。

だけど、俺の心には確かに残っているから、

それを忘れないで、俺は君との中で生きることにするよ。

ずっと、神様は俺を見てくれない。

初めて出逢ったその時に、私は貴方に恋をしました。

毎日が貴方で、貴方以外はありえないって思っていた。

貴方に告白をした時、貴方は「こちらこそ」と笑ってくれたよね。

それが夢のようでとっても嬉しかったんだ。

これからは二人で歩いていけるってことが、とても幸せなことだと思っただ。

でも、ある時、貴方は「別れよう」って私に言ったよね？

忘れちゃったの？ あの日の二人の約束を。

毎日、忘れることができなくて私は泣いたんだよ？

でも、私は貴方に教えてもらったから、

大切な人を想う気持ちを教えてもらったから、もう泣かないって心に決めたんだよ。

ありがとう。

好きだったけれど、貴方を忘れることはできないけれど、今も貴方を想っています。

届かなくても、いつまでも。叶わないなら、貴方の幸せを。

貴方の為に心から、「私の為にありがとう」

。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6256z/>

---

いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

2012年1月10日18時46分発行